

奈良フィールドワークの良さを下級生にデジタルレポートで伝えよう

—主体的な情報活用で情報モラルを身に付ける—

亀岡市立南つつじヶ丘小学校 教諭 広瀬 一弥

hirose-k@kyoto-be.ne.jp

キーワード：情報モラル、インスタントメッセージ、リーフレット作成

1. はじめに

亀岡市立南つつじヶ丘小学校は、平成20年度より、教育の情報化に係る研究を進めてきた。これまで、ICTは児童の理解を深めるために活用され、特に教員が活用する場面が多くみられた、研究を進める中で、児童が思考を深め表現することにも効果的であることが確かめられた。

電子黒板やタブレット端末、インターネットが教室に入ってきて、児童自らがそれらを扱うことが増えてくると、授業展開が変わり、更なる学習効果が出る。一方で扱いを間違えると、ネットワーク上のリスクにさらされることも少なくなく、情報モラルの必要性を感じる。また、生活の中でも様々なデジタルメディアを児童自身が主体的に使うことが増えてきた。

そこで、本事例では、フィールドワークの際、タブレット端末と通信回線を持たせ収集活動をすることや、リーフレットをデジタルブックで作成する活動を通して、情報モラルを意識した、情報活用の実践を行った。

2. 実践の概要

(1) 実施領域・対象児童

国語科・総合的な学習の時間
6年生64人

(2) 実施時期

平成25年5月から6月まで

(3) 取組の計画

- ・活動計画を立てる
- ・奈良フィールドワークでの情報収集
 - ーカメラアプリでの撮影
 - ーメッセージアプリでの情報共有
- ・リーフレット作成
- ・下級生にデジタルリーフレットをプレゼン

(4) 使用機器・ソフトウェア (APP)

タブレット端末 iPad (以下 iPad) 12台
WiMAX ルーター (以下 WiMAX) 12台
メッセージ (Apple)
カメラ (Apple)
E-REPORT COMP (スズキ教育ソフト)

3. 実践の様子

(1) 活動計画を立てる

フィールドワークに出かける前に、活動計画を立てた。計画では、奈良において iPad を使った情報収集を行うこと。調べたことは iPad でデジタルレポートでまとめ、下級生に向けて発信することを確認した。そのうえで、どんな良さを伝えたいかということグループで考えた。このように相手意識・目的意識を明確にしてから活動に入った。

また、奈良のフィールドワーク中には、互いの iPad 同士でメッセージのやり取りをすることを伝え、操作の練習も学校で行った。

(2) 奈良フィールドワークでの情報収集

6人に1台の iPad と WiMAX を持たせフィールドワークを行った。あらかじめ、グループで立てた計画に基づき、グループ別行動をとった。

取材計画を立てた時の目的意識をもって、取材をしていくが、活動が有意義に行えるように。また、後のリーフレット作成に役立つように以下の注意点を奈良へ向かうバスの中で児童に伝えた。

- ・アップとルーズアングルを変えて何枚か撮る
- ・ムービーは15秒までで、積極的に撮る
- ・他人の顔が鮮明に映らないように気をつける

このようにある程度の、制限(しぼり)をかけることで、子どもたちの情報活用の実践の質が上がる。また、グループでこの制限について多様な意見を出し合うことで、協働で問題を解決していくことにつながる。

今回、外国人観光客に焦点を当ててレポートを作るグループがいくつかあったため、全体に事前に指導を行った。必ず写真を撮る際には“Can I take a picture with you?”と同意を求めてから撮るように伝えた。これは、外国人相手だけではなく、写真で人や場所を撮るときにはマナーがあることを指導した。このように情報収集の際に、意識しなければいけない情報モラルに係るマナーを同時に指導するとことは大変効果があると考えた。写真1は東大寺での様子であるが、看板を見たり職員に尋ねたりして、撮影してもよいことを確認してから撮影していた。



写真1 iPadで写真や動画を撮影している様子

グループに分かれて活動する時間は2時間あまりであったが、この間に、各グループ間でメッセージAPPを使い写真を交えた近況報告をさせた。この活動は、互いのフィールドワークの様子を知り合うことで、意欲を高めることや、時間を意識して行動することに加えて、ネットワークを通じて情報を適切に扱う能力を身につけさせたいという思いもある。

近年、児童の身近な生活の場においてもインスタントメッセージ (IM) によるトラブルが数多く報告



写真2 メッセージAPPを使ったグループチャット

されている。中でも本事例のようにユーザー同士がグループを組み、その中でメッセージのやり取りを行う「グループチャット」でのトラブルは後を絶たない。

そのような、日常使うであろうコミュニケーションツールを教育活動の中で使うことで、正しい使い方を理解させ、よりよく使っていく態度を養っていこうと考えた。実際には、不適切な書き込みもあり、学校に戻った後、生きた教材として指導することができた。

(3) デジタルリーフレット作成

自ら見学して取材をしてきたことをもとにデジタルリーフレットを作った。作成はグループで行うこととし、取材と同じメンバー構成である。同じメンバーで作ることで、映像を見て共通体験を想起することができた。国語科の学習として取り組み、リード文の工夫、表現の工夫、映像とことばの関係。事実と感想の分けて書くなどの工夫をした。このそれぞれの観点は、



写真3 デジタルリーフレット制作の様子



写真4 付箋機能を使ったブラッシュアップ

そのまま推敲の観点にもなり、デジタル付箋の機能を使い相互評価し、推敲に役立てた。

(4) 下級生にデジタルリーフレットをプレゼン

作品が完成した後、5年生にデジタルリーフレットを使ったプレゼンテーションをした。実際に触ってもらいながら質疑応答を行った。5年生にも好評で、児童は手ごたえを感じていた。一方、上手く伝わらなかった部分を、その場で修正する児童もいて、情報発信への意欲と責任を感じているようであった。

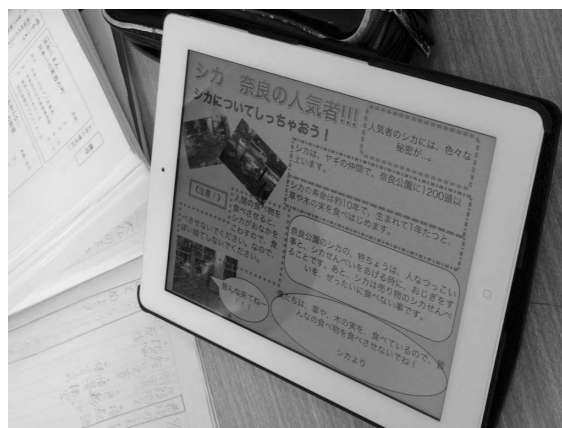


写真5 完成したデジタルリーフレット

4. 実践を終えて

校外学習にタブレット端末を持ち出し、カメラの代わりとして活用することは、これまでから行っている。撮り直しができることや、ムービーが撮れること。撮ったものをすぐにグループで閲覧することができるなど、活用効果も高い。それに加え今回の実践では、WiMAX を一緒に持ち出すことにより、グループ別活動の中でも、互いのグループを感じ合い協働で学べるのが分かった。今後、更に創意工夫し、モバイル回線を活用した効果的な学習を創造していきたい。

デジタルリーフレットは、複数の写真や動画を、埋め込むことができる。写真の枚数や動画の長さを調整することを通して、話し合い活動が活性化し言語活動が充実した。また、相互評価の際、前述した国語科の観点に加えて、適切な写真を使っているか、文章の引用についてなど情報モラルを意識した意見も出た。

今後も新たなメディアを使った、主体的な情報活用で、情報モラルを身に付けた児童を育成していきたい。